

【姫路市立筋野小学校 姫路市立安富北小学校】の取組

「ICT を活用した新しい時代の学び」に関する研究

～ 遠隔授業を通じた 新たな仲間との繋がり ～

1 主な取組

(1)自然学校「リモート発表会」

3校合同による自然学校実施後、同じく3校合同で遠隔授業によってそのふり返りを行った。自然学校中のプログラムにある焼き板体験で持ち帰った板に、それぞれが模様を付け、それらを見せながら互いに思い出などを発表し合った。本来ならば4人や2人で行うところを、新たな12人の仲間と共にふり返ることができ、子供たちは大変嬉しそうだった。



(2)国語科合同授業「リモート句会」

めあて

友だちが作った俳句のよいところを見つけて伝え合おう。



【前日までに】

事前に一人2句ずつ俳句を作り、名前を伏せた一覧表を2校の共有ドライブに入れておいた。子供たちは、前もってそれらの俳句を鑑賞し、よいと思うものをそれぞれ選句した。

【当日】

- ① スライドに映し出される俳句（名前をふせたもの）を全員で音読する。



⑦
サオの先
イクラぬるぬる
夏の川

⑪
川遊び
水がキラキラ
光ってる

- ② よいと思ったものを2句（自分の俳句以外）選び、2校合同のクラスルームよりGoogle フォームで投票する。
- ③ 選んだ2つの俳句のうち1句について、一人ずつ、その理由や感想を発表し合う。
- ④ Google フォーム画面から結果発表
- ⑤ 教師による講評



2 取組の背景

両校の5年生は、入学して以来1クラス2人や4人という限られた人数で過ごしてきた。そのため、授業中などに多数の意見に触れたり、大勢の友達の前で自分の考えを表現したりする経験があまりなく、「多様な意見にふれる場が少ない」ことは、両校の共通の課題であった。

3 取組の経緯

そこで、日頃から交流のある学校同士で遠隔授業を企画し、学校の枠を超えてより多くの意見にふれる場を設定した。少人数学級でじっくりと学んだり考えたりしたことを、他校との同時双方向の交流によってさらに深め、互いの課題を解決しようという目的で、本取組を進めていった。

3校の「自然学校発表会」においては、3校合同で取り組んだ自然学校に関して、「せっかくのふり返りの時間を共有させたい」という願いから、遠隔授業を設定した。3校で事前に打ち合わせをし、子供たちそれぞれが制作した焼き板や、思い出ランキングなどについて発表し合った。

また、2校での国語科の学習においては、同一単元を一緒に学ばせたいという思いから、1学期に学習した「言葉をよりすぐって俳句を作ろう～日常を十七音で～」の単元の発展として取り組むことができるよう、2校で打ち合わせをした。そして、遠隔でも共有できるというメリットから、「リモート句会」を設定した。Google フォームを利用することで、選句の結果発表をリアルタイムで行うことができた。

4 変容

(1) 子供たちの変容

入学当初から限られた人数で過ごしてきた子供たちにとって、新たな仲間がかけがえのない存在である。そんな仲間と共に考えたり、意見を伝え合ったりする経験は大変価値あることだった。

いつもよりも少し緊張した面持ちでPCルームに入ってきた子供たち。初めは、サイドに映った互いの小学校の仲間と少し気恥ずかしそうにあいさつを交わしていたが、授業が進むにつれて緊張もほぐれ、まるで同じ空間にいるかのように画面の向こうにいる仲間と共に笑い合ったり、意見を伝え合ったりしていた。ある児童が、「いつもより2人も多くの意見が聞けてとても嬉しかった。」「また一緒に授業がしたい。」と笑顔で話していたことがとても印象的だった。



(2) 教職員の変容

この授業では、単にオンライン会議システムを利用した授業ではなく、「大型スクリーンを活用して空間を超えた教室と教室をつないだ遠隔合同授業」を目指した。当初、そのシステムや運用が困難であると考え、「大変そう」等のデメリットばかりに目が行った。また、機器を通じた交流をどこか「冷たいもの」と感じていた。しかし、実際にこのシステムを利用することで、離れた場所でも時を共有し、さらには子供たち同士の考えや気持ちを共有することができた。児童の嬉しそうな様子は、大変心動かされる「温かい」時間であり、ICTの新たな可能性を見出すことができた。また、このような学びの場の設定や工夫こそが、私たち教職員の価値あ

る仕事なのだと改めて気付くことができた。

(3) 学校の変容

遠隔授業については、5年生のみの取組ではあったが、その様子を両校の職員全体で共有したり後でふり返ったりすることで、組織として研修に取り組む体制が整ってきた。毎週、ICT支援員を招き、児童の学びに繋がるICTの使い方について、即実践に活かせるような研修を行うことができています。毎週月曜日は、ミニ研修にて、全職員がICTについて、前向きに意見交流をしたり学んだりするという時間をもつことができるようになってきた。



5 見えてきた課題

小規模校にとって、多くの仲間と繋がりをもつことができるICTは、大きな可能性をもっている。しかし、そのシステムについては、手軽に運用できるものとは言い難い。「この单元では、〇〇小学校と一緒に学習しよう」というように、いつ何時でも離れた学校同士が繋がれるように、システムをもっと容易に設定することができれば、小規模校の学びの可能性に繋がっていくと思われる。



6 苜野小学校、安富北小学校が目指す「ICTを活用した新しい時代の学び」



小規模であるがゆえに、授業中の交流が限られている苜野小学校、安富北小学校の子供たちにとって、多くの人と繋がったり多様な考えにふれたりすることは、共通の課題である。今回、「新たな仲間との繋がり」をテーマに取り組んだことは、その課題を克服する一歩となったのではないかと考える。文字通り、隔たりをなくし小規模校の壁に風穴を開けることができる、そんな可能性がICTにはあるのではないだろうか。

ICTは、時間や人の思いを繋げる「扉」として考える。だからこそ、ICTを目的として使用するのではなく、子供たちがワクワクするような、そして確固たるめあてをもった学びの場を、できるだけ多く設定することが重要である。そして、その学びを支える手段の一つがICTなのだと考える。これから、ICTをたくさんある道具の中の一つとして取捨選択し、自分の可能性を広げられるような児童を育てるべく、さらなる実践を進めていきたい。